



聖歌集改訂ニュース

聖歌の改訂と問題語

私たち委員会が新しい聖歌の作詞や翻訳を考える時、慎重に取り扱っている事に「問題語」があります。今、社会一般で問題語とされているものの多くは差別語であったり、不快語であったり、嘲笑語であったりします。或る一つの言葉がこのように問題語となるというのは、人権に関わる問題、人を貶めたり、傷つけたり、聞いていて不愉快になる、といった言葉でしょう。それぞれ確かな理由があってそのようになるのですが、実は、そこに大きな問題が潜んでいる事に気がつきます。

言葉は文化を支えています。日本語に多くある問題語は日本文化の反映ではないかと思えるからです。たとえば差別語は気がつかずに私たちは日常的に使っているかもしれません。その意味では無意識のうちに私たちは多くの人々を傷つけていると言ってもよいでしょう。もし、これらが私たちの礼拝で用いられる聖歌に隠れ住んでいたら、福音と宣教の最も具体的な教会の姿勢を示す礼拝で私たちは盛んに人々を傷つけている事になります。

先年、日本聖公会は聖書や祈祷書にある問題語に対して一定の基準を設けて言いかえることを指示しました。聖歌の改訂に当たっても、この指示は有効なものと、委員会は捉えております。私たちが考えられる「問題語」には、多数の領域があることが分かります。

- ・社会的階層に関わるもの
- ・社会的少数者に関わるもの
- ・人種民族的偏見を表現するもの
- ・身体的特徴に関するもの
- ・障害に関わるもの
- ・政治的な立場への攻撃的なもの
- ・人間の能力を否定しようとするもの
- ・宗教的偏見や日本の戦争責任に関わることなどなど無数です。

私たち委員会はこれらがどのように、私たちの作業に関わってくるのか常に考えております。その作業の中で、起こってくる問題は、実は真に深刻なものと気付きました。私たちの聖歌は実は信仰告白の一つの重大な表現ですから、キリスト教神学、そしてその基礎となる聖書が語る事柄の中に、問題語と指摘されている課題が沢山あるということです。

主イエスは最も低い、人々から無視され、低められ、嘲笑された所から、天の高みに上げられるというキリスト教独特の大転換を表現しようとする時、どうしても問題語にぶつかる時があるのです。例えば、聖母マリアは「いやしいしずめ」でなければ、低いところから高いところへの転換を示すことはできません。もし「いやしいしずのめ」という表現を問題語とされたと、主イエスの生涯の最も重要な誕生の問題を正確に伝えることができ

なくなります。

さあ、どうしよう、というところです。明かに問題語であるというものは、委員会自身がきちんと判断できていると思っていますが、時には社会で問題語とされているものも使わなければならないと感じることがあるのです。さらに、難しい問題提起がされています。それは現在私たちの教会が真剣に取り組まなければならない戦争やアジア諸国との和解の確立です。未だ私たちは和解が成立しているとは思えません。なお努力すべき課題は無数にあります。作詞の作業の中で、これに気付くことも多いのです。

問題語は本来或る一つの言葉が語られた時、それを聞いた人が差別されたと感じたり、不快感をもちたりする、これが問題語とは何かという時の基準になると思うのです。基準は大多数の人々が共感するものである筈です。ですから言葉が述べられた時の状況や場所や聞く人々などの条件によっても人々の受け取り方は違ってくるでしょう。現在ではほぼ基準は定着していると考えられております。しかし、私たち委員会はさらにこの問題を皆さんとともに、ことに実際に問題語によって傷つけられると思っている人々と共に学ぶことから作業を進めていきたいと考えております。さまざまな条件での問題語と使用範囲、許容限度など考えなければならないことは大量です。さらにこの問題への議論を深め、神様の定められた人権を確立していく働きに聖歌集改訂委員会も参与しようとしていることを知っていただきたいと存じます。

(竹内謙太郎)

【聖歌第一次公募の審査を終えて】

聖歌集改訂委員会では5月末の第37回全体委員会で、昨年秋から本年2月末まで実施した《聖歌第一次公募》の審査を行いました。たくさんの御応募ありがとうございました。

応募総数は延べ95編で、詩のみの応募が72編、曲がついた形での応募が21編。曲だけのものも2編ありましたが、募集要項に『曲だけの応募は今回は受け付けません』と明記した通り、審査の対象外といたしました。

審査は改訂委員の合議で行いましたが、今回特に重視したのは『匿名審査』ということでした。具体的には、管区事務所に送付された応募作品は、この段階で改訂委員にはその内容はもちろん、「誰が応募したか」ということすら知ることがないように配慮しました。その上で、筆跡などで作者が特定/推測できないようにするため、信頼できる教会外の第三者の手によってコンピュータ上で書き写されたものが委員会に渡って審査される、という手順を踏みました。作者の年齢性別、職業等一切の予断を排して「内容のみ」拝見したいと考えたのです。

こうしたプロセスを経て委員会では、4名の作者による計7編の詩(うち5編にはすでに曲が付いており、作曲者としては3名)を入選作として選ばせていただきました。その後作者と連絡を取り合って細部の手直し、作曲などについて対話を進め、今号の添付楽譜として発表できる運びとなりました。

個々の作品については別稿を参照いただくことにして、本稿では応募作品の傾向についてご報告したいと思います。

数字のことから申しますと、まず95編中57編が、ある学校の生徒さんたちからの応募でした。この学校の先生が授業の中で呼びかけ、

自由意志によって応募されたものだったのですが、実は『古今聖歌集増補版 '95』の出版にあたっても新作聖歌の公募が行われ、この時に同じようなケースで応募された結果増補版に採用された作品が、増補版19番『心の扉を開くと』でした。今回も中学一年生(当時)の応募が57編に達したわけですが、前述のような審査方法を取ったために、審査時にはこうした事情はまったく特定できなかった結果、今回は残念ながら、この中から入選作はありませんでした。ただ審査後に、作者を知った上で中学生たちの作品を見ていると、「あらわれましぬ」「導きませぬ」「みめぐみあふるる」といった、彼等自身の言葉というよりは現行聖歌集に多く見られるような言い回しも散見され、事のよし悪しは別として現代の若い世代が「聖歌の言葉はこういうもの」と思っている場合があるのではないかと推察いたしました。

更に95編中5編が、ある教会の日曜学校の生徒さんたちからの応募でした。この中からも残念ながら入選作はありませんでした。

さて、あくまで統計処理の便宜上これらを除くと応募点数は33編。うち重複が3編あったため、個人的な応募としては31編、ということになります。

これら31編の作品を今回募集のテーマ別に分類してみますと、【降臨】が2編、【降誕】が7編、【愛】(神の愛・隣人愛)が12編、更にこれらすべてを組み合わせたものが1編。そして、上記以外のテーマを持ったものが6編、テーマが不明確なものが3編ありました。実際の審査にあたっては、テーマに沿っていないものでも内容次第で採用する、という方針を採った結果、7編の入選作品のテーマ別の内訳は【降臨】1、【降誕】1、【愛】4、その他のテーマのものが1、という結果となりました。

ました。

一方、応募者数としては15名で、5編応募された方が2名(どちらも60代)、4編が2名(どちらも50代)、2編応募された方も2名。そして9名の方が各1編の作品を寄せていただきました。また、応募者の年代別に見ると、80代・70代が各2名、60代・50代が各4名、40代が2名、30代が1名。20・10代からは、前述の学校からの他には詩の作品応募はありませんでした。

更に教区別に見ますと、東京・中部教区が各3名、東北・北関東・横浜教区が各2名、京都・大阪教区からの応募者が各1名、他教派(日本基督教団)の信徒の方が1名という数字で、残念ながら今回は、北海道・神戸・九州・沖縄教区からは応募がなかったこととなります。

もう一点指摘しておきたいことは、聖職及び聖職候補生からの応募が極端に少なかったことです。司祭が1名、当時会社員で現在は神学院生の方が1名、計2名5編の応募に留まりましたが、うち4編が入選となりました。今後こうした方々の応募が増える事を、委員会では大いに期待しています。

統計的なことはさておき全体的な傾向としてはまず、短い詩が多かったことが挙げられます。増補版の影響が大きかったと推察されますが、こうした作品は短い中にどれだけ豊かなメッセージと説得力を持っているか、という基準で拝見しました。音楽面でも、増補版にあるようなポップス調のメロディーが少なからずあり、そのうちのいくつかは大変良いものでした。

採用となった詩の特徴の一つはいわゆる「行間を生かした」ことで詩としての鑑賞に堪え得るもの。また結果的にですが、現代における聖書的・宣教的な内容を持ったもので新鮮な感覚のものが入選しました。一方、不採用と

した詩で多く見受けられたのは、叙述あるいは羅列に終わっているものでした。また内容的には神・イエスが不在なものや感謝・賛美が欠落したもの、あまりに個人的色彩が強すぎるもの、そして人間を卑下しすぎているもの。既存の聖歌とあまりにも代わり映えのしないもの。さらに、詩と脈絡のないアーメンが付いたもの（これについては本紙第2号を是非御一読ください）も相当数ありました。さらに言葉遣いの面ではあまりに難解な言葉遣いや奇抜過ぎる表現、文字数の面で歌になりにくいもの、ヒットソングの引用などもいくつか目に付きました。

委員会ではすでに第二次公募を開始しています。今回のテーマは【大斎】【聖婚】【葬儀】で、10月末締め切りと考えています。管区事務所・聖歌集改訂委員会まで応募要項をご請求のうえ、一層多くの応募を、心よりお待ちしております。

(書記 鈴木隆太)

【聖職按手式の音楽】

聖歌集改訂ニュースが2回にわたり各教会に届き、各教会で聖歌集の改訂状況が理解され始めていますが、まだ、東京教区の具体的な反応をまとめるところまでは進んでいません。そこで今回は、礼拝音楽に携わる方々へ、多少の参考になればと思い、今年1月に行われた聖職按手式の音楽について以下に紹介します。

1999年1月6日(顕現日)に、東京教区聖アンデレ主教座聖堂で行われた聖職按手式は、東京教区初の女性司祭の誕生ということで注目を集めました。音楽面でも、豊かな礼拝を目指した新しい試みが行われ、関心を集めました。

司祭志願者から、「みんなが力づけ合える礼拝」「新たな宣教の旅路への静かな出発」という基本コンセプトと「音楽の全体構成に新しい風を取り入れて欲しい、聖歌伴奏、奏楽におけるアンサンブル・アレンジ」という要望があり、オーガニスト3名(前半・後半・アンセムを分担)に加えて、オーボエ1名、フルート2名、パーカッション1名によるアンサンブル、(作・編曲は宮崎尚志氏と宮崎道氏に依頼)合唱は

改訂聖歌集に入れたい聖歌はありませんか？

改訂委員会では、皆さんからの推薦をお待ちしています。改訂聖歌集に収めると良いと思う聖歌を教えてください。

「讚美歌21の何番」「旅行で入手したこんな聖歌」「うちの教会でよく歌っているオリジナル」など何でも結構ですし、日本語、外国語の如何も問いませんが、基本的に礼拝のための聖歌とお考えください。また送られる際は、必ず「推薦理由」も添えてください。「こんな現場で必要とされている」「こんなエピソードがある」といったメッセージも添えていただければ助かります。各教区の担当委員会経由でも、管区事務所内・聖歌集改訂委員会に直接お送りいただいても構いません。

どうぞ宜しくお願いいたします。

教区聖歌隊が担当しました。

聖歌は志願者が選曲し、チャントは、東京教区各教会がそれぞれ違った多くの作曲家のチャントを使用していることを考慮して、基本コンセプトに沿って5人の作曲家の6曲が選ばれ、また、平和の挨拶に多くの時間が割けるように、アンサンブルによる長めの奏楽が用意されました。

アンセムは、米国および韓国からのゲストに配慮して、古今聖歌集増補版第44番の原曲の米国聖公会「Hymnal 1982」収録のスピリチュアルと、大韓聖公会「聖歌 1990」に基づく古今聖歌集増補版第9番が選ばれ、もう1曲は、女性の司祭按手を考えて「神が確かにわたしたちの父であるように、神はわたしたちの母でもあります」で始まるウェールズの作曲家マサイアスの1987年の作品が選ばれました。

《式次第に基づく当日の音楽》

(1) 前奏：オルガン

Pachelbel 'Herr Gott, dich loben alle wir'

(2) 入堂曲：オルガン+アンサンブル

「来ませ、来ませ、平和の主」による幻想曲

(3) 参入聖歌：古今聖歌集第124番

会衆+聖歌隊+オルガン+アンサンブル

(4) キリエ：OHARA 版

会衆+聖歌隊+オルガン

(5) 大栄光の歌：TAKEDA 版

会衆+聖歌隊+オルガン

(6) 詩篇第132番9~18節：

Ouseley 作曲のアングリカン・チャント
聖歌隊+オルガン

(7) 昇階聖歌：古今聖歌集第127番

会衆+聖歌隊+オルガン+アンサンブル

(8) ニケヤ信経：OHARA 版

会衆+聖歌隊+オルガン

(9) 聖霊を求める歌：古今聖歌集第276番

(主教+式典長)と(会衆+聖歌隊)が交唱

(10) 平和の挨拶：オルガン+アンサンブル

(11) 奉献唱：古今聖歌集第43番

会衆+聖歌隊+オルガン+アンサンブル

(12) 聖なるかな：MOMOYAMA 版

会衆+聖歌隊+オルガン

(13) 記念唱：SUZUKI 版：

会衆+聖歌隊+オルガン

(14) 神の小羊：MATSUMOTO 版

会衆+聖歌隊+オルガン

(15) アンセム：聖歌隊+オルガン

Let us break bread together

古今聖歌集増補版第9番

As truly as God is our father

(16) 陪餐唱：古今聖歌集増補版第1番

会衆+聖歌隊+オルガン+アンサンブル

(17) 退堂聖歌：古今聖歌集第294番

会衆+聖歌隊+オルガン+アンサンブル

(18) 後奏：オルガン June Nixon 'Sortie'

(東京教区礼拝音楽委員長 植野幸和)

【聖歌集改訂はみんなの手で】

東京教区礼拝音楽委員会では、昨年に引き続きリードオルガンの研修会にドッキングさせて、聖歌集改訂を共に考える会を開催した。改訂委員会からの報告が主だった1回目から、今回は試作版を歌ったり、出来るだけ信徒の方々の声を伺うというのが狙い。いくつか拾ってみると

言葉について

- ・口語(現代語)にした時に、なるべく文語混じりは避けたい

- ・無理に文語を直すよりも難しい言葉に解説をつけては

- ・ふり漢字(漢字ルビ?)は現行古今聖歌集の

【聖歌集探訪】

今回はアイオナ共同体の歌集を紹介します。

アイオナ共同体はこの数年、その礼拝と、殊に新たに書き下ろされた賛美歌で世界的に注目を集めている、北西スコットランドの離島を本拠地



とする超教派の信仰共同体です。このアイオナ島は周囲15kmほどの小さな島ですが、6世紀に聖コロンバが渡って以来、古くから修道院が設置されて信仰の拠点となっていました。一時期荒廃していたこの修道院を1930年代にジョージ・マックロード牧師が修復、現在の活動の端緒を開きました。スコットランド等の伝統旋律を多用する一方で、多くのオリジナルな賛美歌が中心メンバーで牧師のジョン・ベル氏(詩・曲)、グラハム・モール氏(詩)によって書かれ、それらは同時代の人々、同時代の礼拝の要求に答える内容と今日的な旋律・和声が際だっており、テゼ共同体の音楽とはまた異なる魅力に溢れています。

ジョン・ベル氏は『自分達のために作った賛

美歌が礼拝堂から20メートルも外に出ていくななんて考えてもみなかった』とっていますが、現在までに10以上の曲集が出版され、世界中で用いられています。改訂委員会ではそれらの中から特に美しい旋律を多く含んだ初期の3冊を基礎資料として検討していますが、その詩は象徴的なイメージや口語的な表現をも多く含み、日本語化には苦労しているところ です。

アイオナ共同体の賛美歌は『讚美歌21』にも一曲が含まれているほか、去る7月には教団出版局から32曲を選んで日本語化した歌集『みんなで輝く日が来る』が発行されました。

アイオナ共同体のホームページ URL は、
<http://www.iona.org.uk> です。

アイデアだった

聖歌集は縦書き？横書き？

- ・日本語の詩はやはり縦書きではないか
- ・縦のほうが詩全体(意味)がつかみ易い
- ・楽譜の下に言葉を入れるのなら、下の歌詞は縦にならないか
- ・日本語の詩としては縦書きだろうが祈祷書も横になっている現在、横書きもやむを得ない
礼拝式文用楽譜について
- ・チャントは祈祷書とともに言葉も変わるのだから、別冊にして対応したほうがよい

・ほとんど歌われていないグレゴリオ聖歌を載せる必要があるのか

・もしグレゴリオ聖歌をなくせば、大切な文化がなくなるのでは？

等々。全体としては、小さなことにこだわるよりも、「今までの試作聖歌ではあまり変わったという感じはしない。もっと斬新な変化を」というのが、改訂作業への率直な要望であり、期待でもあるようだ。

関心を持つ方が増えていることに感謝している。
(加藤啓子)

【今号の添付聖歌について】

今号は、聖歌第一次公募の入選作品をお届けいたします。なお、曲がまだついていない作品については、詩のみを掲載しています。

『あなたは誰を』『神様にささげよう』『主イエスの教え給いしは』の3曲は、どれも大阪教区の奥康功司祭の作詩、同じく大阪教区の荒川真紀さんの作曲によるものです。奥司祭は恵我之荘聖マタイ教会牧師。荒川さんは大阪聖パウロ教会信徒で音楽講師、大阪教区の礼拝音楽委員でもあります。

『あなたは誰を』は降臨を主題としており、ルカによる福音書の記述を基調として、イエスの受肉と再臨というアドヴェントの二つの意味がオーヴァーラップされた表現が斬新です。被献日の聖歌として歌うのも良いでしょう。しっとりしたメロディーも詩に良く合っています。

『神様にささげよう』では、シンプルな、繰り返しを含んだ覚えやすい詩と元気の良い音楽に乗せて、「愛」の二つの意味が歌われています。付けられているコードネームも、現代的な感覚を生かしたハーモニーを生んでいます。

『主イエスの教え給いしは』も、神への愛と隣人への愛の両方の重要な「愛」を平易な言葉で歌いつつ慈愛の神を賛美する、現代的ではあるが気品のある作品です。音楽も詩を生かす深みと美しさがあります。

これら3曲はどれも、音楽的にはポピュラーソング系の雰囲気もありつつ品格があり、オルガン以外での伴奏にも適しているでしょ

うが、作曲者の荒川さんには鍵盤楽器用の伴奏譜も書いてくださるようお願いしているところです。

『ナザレのまちより』の作詩者の加藤望さんは東京教区・聖三一教会の信徒で、日本語学校で日本語を教えておられる方です。この詩を書くにあたって加藤さんは、「神とキリストと人の時空におけるつながりをイメージ」されたとの事です。情景が感じられるような、「行間を生かした」詩だと言えるでしょう。作曲者の内藤正彦さんは加藤さんのご友人で、信徒ではありませんが、聖歌を作曲することに大きな情熱を抱いている方です。ここでつけられている曲は、伴奏が完全には旋律をなぞっていないものの、詩を生かしながら決して邪魔をしない、穏やかな音楽です。

『生まれいずるときは』も同じく加藤望さんの作品です。こちらは詩のみの応募でしたが、やはり日本語の美しさを生かした作品です。「神様の永遠の愛をイメージして」詩作された、との事です。

『ともにあつまる 語りあう』は、この春から聖公会神学院で学んでおられる中部教区の聖職候補生、市原信太郎さんの作品です。市原さんは中部教区の礼拝音楽委員も努められ、増補版出版委員会のメンバーでもあった方で、増補版にもその作品が公募入選作として収められています(49番)。この作品も、削ぎ落とした表現の中に「主と共にいる」情景が豊かに語られています。委員会では特に3節の「歩き出す」が高い評価を得ました。詩のみの応募でしたが、市原さんは作曲もなさる方なので、現在作曲を依頼しているところですが、皆さんも曲をつけてみられてはいかがでしょうか。

『星の光る深い夜』の作詩者の青木瑞恵さん、作曲者の坂本日菜さんは共に横浜教区・横浜聖アンデレ教会のオーガニスト。青木さんは聖歌集改訂委員会のメンバーでもあり、坂本さんは作曲家です。この作品はルカによる福音書の降誕の場面を子供にも判る言葉で歌いつつ、やはり日本語の美しさを生かしながら視覚にも訴える作品です。音楽は2種類の譜が応募されましたが、現段階では独特の雰囲気を持ったこちらの曲譜を入選といたしました。フラットが付いていないことに注意して歌ってみてください。

(書記 鈴木隆太)



講習会は、既刊の聖歌集改訂ニュースの試用曲からいくつかを選んで歌ったり、聖歌集の改訂の状況をお聞きしたり、隆太さんのユーモアあふれる解説と合わせてとても楽しい時間でした。「オルガンを弾ける人がいない！」と嘆くよりは、2人で右手と左手を分けて分担してみてもどうか、というコロンプスの卵のようなアドバイスを頂いたり(これはさっそく、私の所属する聖公会神学院の礼拝でもやってみました!)、オルガンがないのでピアノという消極的な考え方ではなく、ピアノにはピアノのよさがあるのでそれを生かした伴奏を工夫してはどうか、という「さすがプロ！」とうなってしまような模範演奏など、実技面で有意義な講習だったことは言うまでもありませんが、一方で「伝統」というものをどう捉え、どう受け継いでいくかという、聖歌集改訂についての根本的な考え方についてのお話を伺うこともでき、一同深く感銘を受けました。「次はぜひ自分の教会にお招きして、自分の教会のほかの信徒さん達にもお話を聞かせたい！」という声も出るほど。このような機会を日本の各地でもっと持つことができれば、聖歌集の改訂をより身近に感じることができる方々が増えるだろう、と思ったこともありました。

【長野伝道区礼拝音楽講習会報告】

ダビデ 市原信太郎

(聖職候補生・中部教区礼拝音楽委員会委員)

中部教区礼拝音楽委員会では、各伝道区(愛岐・長野・新潟)でそれぞれ年1回の講習会を開くことを目標に、各伝道区の礼拝音楽委員が担当して実施しています。実際には、なかなか日程等の関係で全伝道区で実施というのは難しいのですが、今年は長野伝道区に聖歌集改訂委員会書記の鈴木隆太さん(感じが出ないので、以後「隆太さん」と呼ばせていただきます)を講師にお迎えし、講習会を実施することができました。中部教区として隆太さんにおいて頂くのは2年ほど前に名古屋で愛岐伝道区の講習会をお願いして以来で、長野伝道区としては初めてでした。そのことも手伝ってか、会場となった稲荷山諸聖徒教会には、長野県中の教会から30名ほどが集まり、近年まれに見る盛況でした。

【詩部門活動報告】

現在聖歌小委員会詩部門では、現行古今聖歌集の歌詞について「残す」と決まった聖歌を、教会歴に合わせながら検討修正する作業と、海外及び日本の諸教会の聖歌集からの発掘、翻訳作業を同時に進めています。

聖歌の改訂作業の中で、どうしてもやらなければならないことは、日本人以外の作家の作品は、すべて原詩に当たり直さなければならないという作業です。

現行古今聖歌集の場合を取り上げてみますと、原詩の直訳を見ながら、まず歌詞のどの部分を修正するかを検討し、そこに焦点をしばって修正がなされます。それが済むと、さらに全体のバランスと音楽のミーターに合うかどうか検討し、歌になったところで初めて詩部門での作業が仕上げとなります。次にその作品は、詩部門と音楽部門が合同で行う聖歌小委員会にかけられます。同委員会で再検討と修正が加えられて完了と決められたものが、初めて試作品として楽譜に印刷されるのです。

こうした作業は、詩部門と音楽部門で扱う手順が反対になることもありますが、すべての作品に対して同じように行われます。一例として、現在多くの世界の諸教会及び日本の諸教会の聖歌は、音楽部門によって発掘作業がなされていますが、発掘されたものは詩部門に回され、詩部門が直訳および詩作の作業を行い、再び聖歌小委員会に掛けて、採用決定がなされています。

この行程には多くの人手が必要です。現在、聖歌集改訂委員を含む70名近い方々のご協力によって、作業は順次進められております。しかしまだ、詩作に協力してくださる方がかなり不足しています。

聖歌の翻訳は一般の翻訳と多少異なり、語学の力、文学的要素だけでは翻訳に難をきたします。しかし日常の信仰生活を通して、聖書の言葉、キリストと共に歩む気持ちで心を傾けてくだされば、自然に慣れていただけると思います。英語、ラテン語、ギリシャ語、ドイツ語、中国語、韓国語、その他の詩の翻訳および日本語の詩の修正、創作を含むすべての詩作作業に協力してみようとお思いの方は、ぜひ聖歌集改訂委員会、青木瑞恵(TEL&FAX 045-881-3643)までお申し出ください。よろしく願いいたします。

(青木瑞恵)

1999年8月現在の翻訳・詩作者名簿

(敬称略・50音順)

相沢みどり、東 弘彦、青木瑞恵、赤井勝哉
石井 恵、市原信太郎、伊藤高章、井原泰男
今井丞治、植松 誠、ウィルソン・ウォーレン
牛島達夫、大岡 創、大野清夫、梶原史朗
加藤啓子、加藤俊彦、加藤 望、加藤博道
神谷淑子、菊池伸二、木田啓介、小池宣朗
小谷春夫、近藤慎三郎、佐々木靖子
笹森田鶴、鈴木隆太、関 正勝、関本 肇
高野晃一、高橋正平、高橋知代、竹内一也
竹内謙太郎、竹内 弘、谷 昌二、塚田都子
中渡道夫、那須輝彦、中原千津子、中村晴子
名取多嘉雄、西村克彦、野々目晃三、野村 潔
浜屋憲夫、福井嘉彦、藤村美織、古本純一郎
堀口香代子、松岡 虔一、松本正俊
松本ミサヲ、三鍋 裕、三原一男、宮崎 光
武藤六治、村坂浩子、森 紀旦、安永和夫
柳田 裕、山崎 剛、山根貞雄、山野繁子
吉谷かおる、脇山靖子

【5・7・8月の全体委員会から】

5・7月は京都教区センターで、8月は和歌山聖救主教会で全体委員会が持たれました。5月の全体委員会は、その大部分が第一次公募作品の審査に費やされました。その経緯は別稿にご報告した通りです。

一方、増補版聖歌の5段階評価は8月までで、50曲すべての評価を終了しました。結果については本紙次号でお伝えできると思いますが、そのままの形で改訂聖歌集に引き継ぐものが20曲程度、また改訂聖歌集には引き継がないと判断した聖歌も10曲ほどに上りました。なお増補版自体は第3刷となりましたが、7番『おどり出る姿で』については委員会での議論を先取りして反映する形で、改訂版を待たずにこの第3刷で語句の訂正を一箇所だけ行いました。是非手にとってご覧になってみてください。

8月には、古今聖歌集と増補版のチャントの評価に着手しました。改訂聖歌集におけるチャントの理念を論じつつ作業を進めていますが、現状ではチャントの曲譜の評価については、

- a. 会衆にとっての歌いやすさ・奏楽者にとっての弾きやすさ
 - b. 喜び、感謝の音楽としての表現力
 - c. その旋律であるべき必然性
- といった基準であたっています。

また5月以降、10月1・2日に予定されている担当者会の準備に入っています。増補版の出版をきっかけとして開催されるようになったこの《各教区礼拝音楽担当者会》は95・96年の東京を皮切りに97年は京都、

98年は横浜で開催されましたが、横浜での席上で本年度の開催地の立候補を呼びかけたところ中部教区が名乗りを挙げてくださったことから、本年は名古屋・日本カトリック研修センターでの開催が決定しています。関係各位にはこのニュースレターと同時にご案内が届いたことと思いますが、特に中部教区の多くの皆さんの傍聴を歓迎いたします。これに関するお問い合わせは、中部教区礼拝音楽委員会まで。なお、担当者会は2000年も同時期に開催したいと考えています。開催教区の立候補を歓迎いたします。

次回の全体委員会は10月の担当者会直前、名古屋で第40回を開催の予定です。



発行：聖歌集改訂委員会

ご意見・ご質問は日本聖公会管区事務所まで
〒162-0805 東京都新宿区矢来町6-5
TEL 03-5228-3171 FAX 03-5228-3175